翻訳絵本の語り
－ Sendak作 *Where the Wild Things Are* の二つの訳 －

多　田　昌　美

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第65号抜刷）

美作大学・美作大学短期大学部紀要
2020, Vol. 65. 73〜84

報告・資料・研究ノート

翻訳絵本の語り
－ Sendak作 *Where the Wild Things Are* の二つの訳 －

Verbal Expressions in Translated Picture Books
—Two Translations of *Where the Wild Things Are*

多　田　昌　美

キーワード：絵本、翻訳、幼児と言葉

はじめに

母語以外の言語で書かれた物語を子ども読者が楽しむ際に、翻訳は欠かせない。しかし翻訳には原書と訳書の言語の文構造の違い、表現とその含意の違い、時代や文化背景の違いなど、多くのハードルが存在する[1]。更に絵本の翻訳の際には、幼年の読者も理解でき、楽しむことのできる文体と語彙が求められる。そのため絵本の翻訳は、訳者（並びに編集者）がその絵本をどう解釈したかの現れであると同時に、子ども読者をどのように見、物語世界を届ける際、どのような言葉が子ども読者にふさわしいと考えたのかの現れでもある。

このことは、複数の訳書が存在する絵本を比較するとよりはっきり見ることができる。今回は神宮輝夫訳（『かいじゅうたちのいるところ』冨山房、1975、以下『かいじゅう』と略す）で親しまれているMaurice Sendak作*Where the Wild Things Are*（以下「原書」と表記）と、神宮訳に先立つウエザヒル翻訳委員会訳『いるいる　おばけが　すんでいる』（ウエザヒル出版社、1966、以下『いるいる』と略す）とを、文体とリズム並びに語句という二つの観点で比較・検討することで、それぞれの訳の特徴と、そこからうかがえる絵本観について考察したい。

（絵本の全文については、本ノート末に原書・『いるいる』・『かいじゅう』の対照表を掲載しているので参照されたい。）

1．文体とリズム

—七（八）五調・繰り返し・擬音語／擬態語—

まず、両翻訳の文体に見られるリズム・繰り返し・擬音語／擬態語といった要素について考えたい。

『いるいる』の大きな特徴の一つが一貫した七（八）五調のリズムである。七五調を強く意識していることは、次のような表記からも見て取ることができる。

「やめろ！　うるさい！　たくさんだ！」
おばけが　ぼうやに　しかられた
さわぎ　　すぎて　　しかられた
いたずら　しすぎて　しかられた
（『いるいる』第15画面）

「さわぎ」の後は2字空け、「すぎて」の後も2字空けにして、行後半の「しかられた」が同じ位置から始まるようにしてある。七語調の後半五文字の出だし位置を揃え、一定のリズムを視覚的にも示そうとするこの配置は、『いるいる』全体を通じて行われており、音と見た目の両方で七五調を強く打ち出している。

またこの引用では、「しかられた」という語が3行続きで繰り返し用いられているのが目に留まるが、繰り返しの多用も『いるいる』の文体の大きな特徴であ

る。同じ第15画面の文章は次のように続く。

ばんごはんも　もらえずに
おばけは　しずかに　なりました
しずかに　しずかに　なりました
ぼうやは　さびしく　なりました
だんだん　さびしく　なりました
だれかが　こいしく　なりました
どこかで　なにかが　においます
とおくで　かすかに　においます
ばんごはんの　においです
おいしそうな　においです
（『いるいる』第15画面）

しかしこの画面の原書を見ると、繰り返しは全く用いられていない。

"Now stop!" Max said and sent the wild things off to bed
without their supper. And Max the king of all wild things was lonely
and wanted to be where someone loved him best of all.
Then all around from far away across the world
he smelled good things to eat
so he gave up being king of where the wild things are. （原書　同画面）

先の 4 行の引用箇所に該当するのは“'Now stop!' Max said”のみである。その後はマックスが何をし、何を感じたのかを、“And”“Then”“so”といったシンプルな言葉で繋ぎつつ重ねており、むしろ淡々とした印象がある。絵本は声に出して読まれることが多く、耳で聞く物語には確かに繰り返し表現は有効であるが、原書と比較した場合、『いるいる』のくどさは明白であり、原書との乖離は大きいと言わざるを得ない。『いるいる』の七五調について、三宅興子は「絵本の翻訳について――ぼっちゃん、じょうちゃん的発想の残滓――」で、「徹底的に原文を無視して韻文のような響きの方に重点をおいたもの」であると指摘し[2]、（この後 2 で取り上げる）「ぼうや」等の語彙の問題と合わせて「響きを大切にという意図にもかかわらず、失ったものはあまりにも多い」と述べているが[3]、韻文調であることのみならず繰り返しの多用についても、響きの重視の結果失われたものという点で同様の指摘が可能だろう。おそらくは聞き手である幼児に伝わりやすい心地よい表現という点での配慮だったのだろうが原書の物語世界を伝えることが翻訳の役割であると考えると、大きく外れてしまった感が強い。

次に『かいじゅう』の文体だが、先に引用した『いるいる』と同じ箇所は次のようになっている。

「もう　たくさんだ。やめえ！」マックスは　さけんだ。
ゆうごはんぬきで　かいじゅうたちを
ねむらせた。すると、どうだろう、マックスは　おうさまなのに　さびしくなって、
やさしい　だれかさんの　ところへ　かえりたくなった。
そのとき、とおい　とおい　せかいの　むこうから、
おいしい　においが　ながれてきた。
マックスは　かいじゅうたちの　おうさまを　やめることにした。
（『かいじゅう』同画面）

こちらはおおむね原書に沿った訳である。しかしこちらにも「とおい、とおい」という言葉の繰り返し、及び 2 で取り上げる「だれかさん」という語の選択など、原書よりはやや情感に寄った訳出がされている。

原書にはない加筆による文のリズムの創出という点では、擬音語／擬態語にも注目したい。Weblio[4]の「英語の擬音表現（オノマトペ）の学び方・使いこなし方」では、「日本語の擬音表現はもっぱら副詞的に用いら

れますが、英語では動詞にオノマトペ的な役割が含まれている場合が多々あります」とされているが[5]、本書の二つの翻訳にも、原書の動詞表現を擬音語・擬態語を添えて訳する例が頻繁にみられる。

まず、マックスが出会ったwild thingsの描写である。原書では“roared”“gnashed”“rolled”“showed”と、動詞で wild things の行動が表現されているが、両翻訳ともその箇所を擬音語／擬態語を用いて訳出している。

they roared their terrible roars and gnashed their terrible teeth

and rolled their terrible eyes and showed their terrible claws（原書　第 9 画面）

おばけが　ぼうやに　ほえました
きばを　　がちがち　させながら
おそろしい　こえで　ほえました
おおきな　めだまで　にらみます
ぼうやを　じっと　　にらみます
するどい　つめが　　ひかります
ぼうやの　まえで　　ひかります
（『いるいる』同画面）

かいじゅうたちは、すごい　こえで　うぉーっと　ほえて、すごい　はを　がちがち　ならして、
すごい　めだまを　ぎょろぎょろ　させて、すごい　つめを　むきだした。
（『かいじゅう』同画面）

どちらの訳も“gnash”という箇所の訳に「がちがち」という擬音語を用いている。更に『かいじゅう』では「うぉーっと」「ぎょろぎょろ」という表現を用いており、2 行に書かれた 4 つの動作のうち 3 つまでに擬音語・擬態語を添えていることになる。

更に、海がマックスの船を運んでくる場面でも、

and an ocean tumbled by with a private boat for Max（原書題 7 画面）

こんどは　うみが　　ざんぶりこ
ぼうやも　おふねで　ざんぶりこ
（『いるいる』同画面）

そこへ、なみが　ざぶり　ざぶりと　うちよせて、マックスの　ふねを　はこんできた。
（『かいじゅう』同画面）

と、どちらも“tumbled by”を「ざんぶりこ」「ざぶり　ざぶりと」と擬音語を加えて表現している。特に『かいじゅう』においては、「なみが　うちよせて」のみでも原書の内容は伝わること、「ざぶり」を 2 回重ねていることもあり、擬音語の使用が目に留まる。

この、擬音語・擬態語の多用は『かいじゅう』の特徴の一つでもある。先に挙げた第 9 画面の表現は、マックスが帰還する直前の第16画面でも繰り返され、wild thingsの行動として強く印象に残るものとなっている[6]。また、マックスの寝室が森に変わり始める第 4 画面でも、原書の“That very night in Max's room a forest grew”を「すると、しんしつに、にょきり　にょきりと　きが　はえだして、」と、「にょきり　にょきり」というインパクトの強い擬態語を重ねて訳出している[7]。

神宮自身は「おはなしめぐり：『かいじゅうたちのいるところ』の訳者　神宮輝夫さん」（「毎日新聞」2009年11月25日）[8]で、「余分な言葉は入れず、ほぼ原文通りに訳しました。」と述べている。にもかかわらず、擬音語・擬態語の積極的な採用が見られることは、子どもが聞くものとしての絵本の楽しさに向けての配慮という側面があったのではないか。『いるいる』が七五調と繰り返しの多用で作ろうとした「語り」のリズムと聞く楽しさを、要所に擬音語・擬態語を（時に重ね使いで）追加するという形で実現しようとしたのが『かいじゅう』なのではと考える。

2．語　句

文体と並んで、訳語の選び方も訳書の印象を大きく左右する要素である。この点に関しては、本作品のタイトルの一部であり、キーワードともなっている“wild thing(s)”と、マックスや母親に言及する際の呼称の2点を取り上げたい。

・「おばけ」と「かいじゅう」―wild things―

『ジーニアス英和大辞典』によれば、“wild”の語源は“wilde”（野生の、自然のままの）であり、意味としては１．（動植物が）野生の、野育ちの、人慣れしていない　２．（土地が）荒れ果てた、荒涼とした、自然のままの、耕作していない、人の住まない　３．（人などが）野蛮な、未開な　４．（人などが）荒っぽい、乱暴な、手に負えない、放埒な　等となっている[9]。ここから、人・動物・場所を問わず、人の手や文明の支配の及んでいない、あるいは手のつけられないものを表す形容詞であることがわかる。

本作品の原書には“wild”という言葉がタイトルを含めて12回登場する（対照表参照）。そのうち11回が“wild thing(s)”であり、１回が“wild rumpus”（12画面）である。更に、“wild thing(s)”のうち“where the wild things are”と「wild thingsのいる場所」を表すために用いられているのが４回、主人公マックスを意味するものが２回、マックスが出会うものたちを指す場合が４回、マックス・出会うものたち両方を指す場合が１回（“and made him king of all wild things”、11画面）である。“wild”は人間・非人間・行動のすべてに通じる要素を表す言葉として用いられているのである。

両翻訳を見てみると、wild thing(s)に対して、『いるいる』では「おばけ」、『かいじゅう』では「かいじゅう」と、いずれも想像上の存在を表す言葉を用いている（『いるいる』では「おばけ」以外の訳語も用いられているが、この点については後述する）。『広辞苑』で「かいじゅう」は「１．あやしいけもの、正体不明の不思議な獣。　２．映画・漫画などで、恐竜などをもとに創作した、特別な力をもつ生き物。」とされており[10]、怪獣映画などのイメージから、体格が大きく力が強く乱暴で、打ち勝つには手ごわい相手という印象を与えると思われる。一方の「おばけ」は、同じく『広辞苑』では「ばけもの。へんげ。妖怪。また、奇怪なもの、ばかでかいもの。」とされ[11]、「かいじゅう」よりも奇怪さという側面を強く感じさせる語である。

神宮輝夫は「かいじゅう」を訳語に選んだ理由として、先述の「おはなしめぐり：『かいじゅうたちのいるところ』の訳者　神宮輝夫さん」で、「子どもが読みやすくて言いやすく、絵のイメージにも合う『かいじゅう』にした」と、絵を考慮してのことだったと述べている[12]。本作品の（マックス以外の）wild thingsは、“terrible teeth”“terrible eyes”“terrible claws”（第９画面）を持ち、鳥や牛、ヤギ、人間などの体の部分を組み合わせたような姿で描かれており、その特異性と大きな体格に見合うと思われた語が「かいじゅう」だったのだろう。またこれは推測になるが、『いるいる』の場合も同様に、描かれたwild thingsの非日常性から、「おばけ」という語が選ばれたのかもしれない。

こういった選択の結果、本作品を、日常世界の子どものwildな側面の抑圧と解放、そしてその後の日常への帰還の物語と解釈するなら、「かいじゅう」「おばけ」という想像上の存在に特化した訳語を用いることで、子どもの持つwild性という側面が薄まってしまった、という指摘は可能だろう。またそれぞれの翻訳が出版された当時に子どもたちに人気を博していた物語[13]の「おばけ」「かいじゅう」のイメージが入り込んでしまう可能性も考えられる。しかしこれはwildと同様の意味の広がりを持つ日本語がないことに由来するものであり、絵本にとって重要な幼年読者にとっての受け入れやすさを優先し、更に絵本が手に取られるか否かを決定する大きな要因としてのタイトルのインパクトも加味して考えると、評価のできる選択だったと言える[14]。

（なお『いるいる』ではタイトルの「おばけ」の他に、母親の「まあ、こわい」（第３画面）、「かいぶつ」（10画面）と、３通りの訳語が用いられている。このため

マックス自身がwild thingsとの同類であることが『かいじゅう』より見えにくくなってしまっている。）

・「ぼうや」と「だれかさん」―呼称―

英語を日本語に翻訳する際、“I”“he”などの代名詞をどう訳すのか（あるいは訳さないのか）は、登場人物及び作品全体の印象を決定する重要な要素である。本作品には第３画面のマックスの言葉"I'LL EAT YOU UP!"に“I”が、地の文の各所にマックスを指す言葉として“he”が用いられている。このうち“I”についてはどちらの訳も訳出していないため、以下“he”について検討する。

『いるいる』では主人公マックスを指す言葉として、原書の該当箇所が“he”であるか“Max”であるかにかかわらず、一貫して「ぼうや」という語を用いている（マックスという名は第１画面の「マックスぼうや」以外には出てこない）。この「ぼうや」という語について三宅は、先に挙げた「絵本の翻訳について――ぼっちゃん、じょうちゃん的発想の残滓――」で、「センダックのこの絵本ほど、「ぼうや」とか「おふね」という幼稚なことばのそぐわない絵本はない」と強く批判している[15]。

「ぼうや」という語は、大人が幼い男の子に呼びかける、あるいは言及する際の呼称であり、子ども視点のものではない。この「ぼうや」が多用されたことで、『いるいる』の語り全体が、マックスを見守る大人目線での語りになっている。子ども読者はしばしば主人公と同化して物語を楽しむといわれるが、『いるいる』の聞き手は「ぼうや」として、大人に見守られながら（しかも大人の声で読み語られる）作品世界を体験することになる。安心・安全の世界ではあるだろうが、マックスが自らのwildさ（大人あるいは人間の規範の及ばない手のつけられなさ）を認めない母親に反発するところから彼の旅が始まり、wildさを存分に発揮し堪能したからこそ帰宅できただろうことを考えると、本作品におけるwild性の意味が大幅に薄められてしまったことになる。

一方『かいじゅう』では“he”も含めてすべて「マックス」と訳されている。『いるいる』と比較すると、大人の価値観がわりこんでこないマックス自身の物語として読み・聞くことができ、彼自身の冒険を簡潔に語る原書の持ち味により近いものになっている。

しかし『かいじゅう』にも原作より情緒に寄った訳出がないわけではない。注目したいのは第15画面の次の箇所である。再掲になるが引用する。

. . . .And Max the king of all wild things was lonely

and wanted to be where someone loved him best of all. （原書　第15画面）

（…）すると、どうだろう、マックスは　おうさまなのに　さびしくなって、

やさしい　だれかさんの　ところへ　かえりたくなった。（『かいじゅう』同画面）

ここでは“someone”を「だれかさん」と訳している。『いるいる』では「だれかが　こいしく　なりました」と、「だれか」を用いており、“someone”の意としても、子どもに伝わる語という点からも、「だれか」で十分であると考えられる。にもかかわらず「だれか『さん』」が採用されているのである。

ここまでの、自分を叱る母親に対し、"I'LL EAT YOU UP!"と叫び、閉じ込められた部屋から彼と同類であるwild thingsのいる場所に向かい、そこで最もwildな存在だと認められるマックスの内心を語る言葉としては、「だれか『さん』」という情感の強い語はそぐわないように思われる。こういった語感は受け取り手個々人の感覚によるものと理解したうえで述べるなら、この言葉で一瞬語りの軸がマックス自身から離れてしまったような印象を受けた。

もちろんこの場所はマックスが“where the wild things are”ではなく“where someone loved him best of all”を選ぶ転換点であり、彼の表情からもwild thingsたちとの騒ぎだけでは満たされない何かがあることが十分うかがえるし、この画面では“And”の訳

として「すると」に「どうだろう」が加えられ、彼の心の変化が強調されている。「だれか『さん』」も、マックスの気持ちの変化を強調するためのものだったという解釈も可能だろう。しかしその点を考慮してなお、「さん」はやや踏み込みすぎであり、不要だったのではと考える。

3．考察

ここまで、『いるいる』と『かいじゅう』について、文体と語句という二つの面から比較・検討を行ってきた。その結果まず見えてきたことは、『いるいる』が七五調と繰り返し、『かいじゅう』が擬音語・擬態語の多用と、手法は違うものの、両者とも「読み手が声に出して読み、幼年の読者が聞いて楽しむもの」という絵本の性質を生かそうとした訳出を試みていた、ということである。語句に関しては、wild の意味の広さに見合う日本語の単語が見当たらないため、両者とも（おそらく）絵のイメージに寄せた想像上の存在を表す語を選んでいた点が共通している。

相違点としては、やはり絵本の中の語り手の立ち位置だろう。『いるいる』はマックスを終始「ぼうや」と呼び、彼がwildであろうとその王様になろうと、彼を「見守る」大人の視点から語っている。そのためマックスの大人の価値観に支配されないwildさという側面が薄まり、原書の持ち味が失われてしまっていた。加えて「おばけ」という訳語の選択も、（これは想像になるが）1960年代半ばに人気を博していた「おばけのQ太郎」というマンガ・アニメの連想が働くとすれば、「おばけ」は脅威を感じさせるというよりは少し変わった遊び相手を思わせる可能性がある。だとすれば、原書におけるwild thingsとの緊張感は薄まり、この点でも作品世界全体が安心なものとして提示されたともいえるだろう。『いるいる』の背後には、絵本とは大人が子どもを見守りつつ、その中で子どもが楽しめるものを提供するもの、という絵本観があったと推察できる。

その点『かいじゅう』は終始マックスの視点に立とうとし、読者が彼と共にwhere the wild things areへ行き、wild性を存分に発揮できる訳になっている。しかし、センダックが説明しすぎの言葉を避け、試作段階よりも文章を短くし、絵に語らせるようにしたとされているのに対し[16]、物語の転換点では「にょきりにょきり」や「ざぶり　ざぶり」「だれかさん」のように、擬態語やそれまでになかった系統の語彙を用い、ふくらませて印象付けているのも事実である。原文を尊重しつつ、必要と感じられたところでは強調したい点をやや押し出すための言葉を加えることで、絵本の言葉は子ども読者により「分かりやすく伝わりやすい」ものになる、という感覚が『かいじゅう』の訳の背後にあったのではないだろうか。

おわりに

*Where the Wild Things Are*の二つの訳を通して、翻訳絵本の言葉について検討してきた。その結果、幼年読者が聞いて楽しめるものにする、という「楽しめる」の内容をどう考えるかで、選ばれる言葉も絵本が与える印象も大きく変わることを見て取ることができた。大人が子どもに語るのか、主人公に即して語るのか、言葉を重ねて印象付けをするか、できる限り絵に任せるか、これらの組み合わせで選ばれる言葉が決まり、読者の前に示される作品世界の印象が変わってくる。そしてこれは三宅が1979年に既に、翻訳絵本を読んでいてのひっかかりや原文と訳とのイメージが変わることの原因として「子どもの認識力や理解力をつい子どもの表現力の限界と混同して、幼児語を使用したり、説明的になったり、子どもにわかりやすい語彙に入れかえたりしている場合」があると指摘していたこととともつながるもので[17]、子ども読者の受容能力を高く見るならば、絵に任せた、あるいは付け加えをしない翻訳になると思われる。

センダックの絵本に関していえば、2019年11月に*Outside Over There*（原書　1981）の新訳が出版された。アーサー・ビナード訳の『父さんがかえる日まで』（偕成社）では、従来の脇明子による『まどのそとのそのまたむこう』（福音館書店、1983）とはどのように異なる工夫がなされ、どのような作品世界が提示

されているのか、比較検討することを今後の課題としたい。

1　灰島かりは「翻訳の窓から、子どもたちの今を見ると……」(「ネバーランド」No.1　てらいんく、2004、188-90）で「NO（ノー)」を絵本でどう訳すかという問題を取り上げ、日本語と英語の特徴にまで踏み込んで絵本の翻訳の問題を論じている。
2　三宅興子「絵本の翻訳について――ぼっちゃん、じょうちゃん的発想の残滓――」(三宅興子『イギリス絵本論』翰林書房、1994、321）初出は「翻訳の世界」1979年 6 月号
3　同、322
4　ネット上で英語辞書・翻訳・英会話等を提供する会社。(https://www.weblio-inc.jp/　2019年11月13日確認）
5　Weblio英会話コラム「英語の擬音表現（オノマトペ）の学び方・使いこなし方」https://eikaiwa.weblio.jp/column/phrases/natural_english/english-onomatopoeias　(2019年11月13日確認）
6　『いるいる』では第 8 画面と第15画面の訳文が異なっており、原書では同一表現だったことが見えなくなっている。
7　同箇所の『いるいる』の訳は「ぼうやの　おへやが　かわります／どんどん　どんどん　かわります・もりの　　きまでが　はえました」となっている。「どんどん」という擬態語を用いているものの、「にょきり」ほどのインパクトはない。
8　「おはなしめぐり:『かいじゅうたちのいるところ』の訳者　神宮輝夫さん」(「毎日新聞」2009年11月25日11面）より引用
9　wildの項（電子辞書版『ジーニアス英和大辞典』大修館書店）
10　「かいじゅう」の項（電子辞書版『広辞苑』第 6 版　岩波書店）
11　「おばけ」の項（電子辞書版『広辞苑』第 6 版　岩波書店）
12　前掲「おはなしめぐり：『かいじゅうたちのいるところ』の訳者　神宮輝夫さん」より
13　1960年代後半には藤子不二雄の「おばけのQ太郎」が子どもたちの人気を博していた。また東映の怪獣映画以来、ウルトラシリーズなどを通して「かいじゅう」は子どもたちの間に浸透していたと考えられる。
14　現実の子どものwild性に意味合いを寄せた語としては「あばれんぼう」などが考えられるだろうが、絵本のタイトルとしては「おばけ」「かいじゅう」のインパクトには及ばないと思われる。
15　三宅、前掲書、321
16　ハル・マルコヴィッツ『「かいじゅうたち」の世界へ』水谷阿紀子訳、文渓堂、2009、92-94
17　三宅、前掲書、318

＜使用テクスト＞

Sendak, Maurice. Where the Wild Things Are. New York: HarperCollins, 1963.
モーリス・センダック『いるいる　おばけが　住んでいる』ウエザヒル翻訳委員会訳　東京：ウエザヒル出版社、1966
モーリス・センダック『かいじゅうたちのいるところ』神宮輝夫訳　東京：冨山房、1975

＜引用参考文献＞

ハル・マルコヴィッツ『「かいじゅうたち」の世界へ』水谷阿紀子訳、文渓堂、2009
三宅興子「絵本の翻訳について――ぼっちゃん、じょうちゃん的発想の残滓――」(三宅興子『イギリス絵本論』翰林書房、1994、318-23）初出は「翻訳の世界」1979年 6 月号
灰島かり「翻訳の窓から、子どもたちの今を見ると……」「ネバーランド」No.1　てらいんく、2004、188-94
「おはなしめぐり：『かいじゅうたちのいるところ』の訳者　神宮輝夫さん」(「毎日新聞」2009年11月25日)『毎日新聞［東京］縮刷版』2019年11月　No.673
Weblio英会話コラム「英語の擬音表現（オノマトペ）の学び方・使いこなし方」https://eikaiwa.weblio.

jp/column/phrases/natural_english/english-onomatopoeias（2019年11月13日確認）
電子辞書版『ジーニアス英和大辞典』大修館書店
電子辞書版『広辞苑』第 6 版　岩波書店

Where the Wild Things Are　翻訳対照表

画面	*Where the Wild Things Are*	『いるいる　おばけが　すんでいる』	『かいじゅうたちのいるところ』
1	The night Max wore his wolf suit and made mischief of one kind	あたりが　くらく　なりました マックスぼうやの　せかいです 「こんやは　なにを　しようかな おおかみごっこを　してみよう」	ある　ばん、マックスは　おおかみの　ぬいぐるみを　きると、いたずらを　はじめて
2	and another	「さあどうだ！　おおかみぼうやの　マックスだ！」	おおあばれ…
3	his mother called him "WILD THING!" and Max said "I'LL EAT YOU UP!" so he was sent to bed without eating anything.	「まあ　こわい！」 おかあさんが　ふるえます びっくりぎょうてん　ふるえます 「たべちゃうぞ！」 ぼうやが　あまり　さわぐので とうとう　ぼうやは　ねどこべや 「ばんごはんも　あげません！」 ぼうやは　ひとりで　おこります おへやで　ぷんぷん　おこります	おかあさんは　おこった。「この　かいじゅう！」 マックスも　まけずに、「おまえを　たべちゃうぞ！」 とうとう、マックスは　ゆうごはんぬきで、しんしつに　ほうりこまれた。
4	That very night in Max's room a forest grew	ぼうやの　おへやが　かわります どんどん　どんどん　かわります もりの　　きまでが　はえました	すると、しんしつに、にょきり　にょきりと　きが　はえだして、
5	and grew ——	その　きが　どんどん　そだちます	どんどん　はえて、
6	and grew until his ceiling hung with vines and the walls became the world all around	ぼうやの　おへやは　もりのなか つるくさ　するする　のびだして おへやは　どこにも　なくなった とうとう　おへやが　なくなった	もっと　もっと　はえて、てんじょうが　きの　えだと　はっぱに　かくれると、 かべが　きえて、あたりは　すっかり　もりや　のはら。
7	and an ocean tumbled by with a private boat for Max and he sailed off through night and day	こんどは　うみが　　ざんぶりこ ぼうやも　おふねで　ざんぶりこ あさから　ばんまで　はしります どこかの　くにまで　はしります	そこへ、なみが　ざぶり　ざぶりと　うちよせて、マックスの　ふねを　はこんできた。 マックスは　ふねに　のった。よるも　ひるも　こうかいした。
8	and in and out of weeks and almost over a year to where the wild things are.	ざんぶりこっこが　いっしゅうかん ざんぶりこっこが　いちねんかん おふねは　やっと　つきました おばけの　くにに　つきました	1しゅうかん　すぎ、2しゅうかん　すぎ、 ひとつき　ふたつき　ひが　たって 1ねんと　1にち　こうかいすると、 かいじゅうたちの　いるところ。

Where the Wild Things Are　翻訳対照表			
画面	*Where the Wild Things Are*	『いるいる　おばけが　すんでいる』	『かいじゅうたちのいるところ』
9	And when he came to the place where the wild things are they roared their terrible roars and gnashed their terrible teeth and rolled their terrible eyes and showed their terrible claws	いるいる　おばけが　すんでいる おばけが　ぼうやに　ほえました きばを　　がちがち　させながら おそろしい　こえで　ほえました おおきな　めだまで　にらみます ぼうやを　じっと　　にらみます するどい　つめが　　ひかります ぼうやの　まえで　　ひかります	マックスが　りくちに　ふねを　つけると、 かいじゅうたちは、すごい　こえで　うぉーっと　ほえて、すごい　はを　がちがち　ならして、 すごい　めだまを　ぎょろぎょろ　させて、すごい　つめを　むきだした。
10	till Max said BE STILL! and tamed them with the magic trick of staring into all their yellow eyes without blinking once and they were frightened and called him the most wild thing of all	「だまれ！うるさい　おばけども！」 ぼうやは　まほうを　つかいます ぼうやの　まほうを　つかいます おばけは　しずかに　なりました しょんぼり　しずかに　なりました ぼうやの　めだまで　にらみます おばけの　めだまを　にらみます 「ちいさな　すごい　かいぶつだ！」 おばけの　ほうが　　ふるえます 「すごい　おばけが　やってきた！」 おばけの　ほうが　　いいました	とうとう、マックスは　はらをたてた。「しずかに　しろ！」と　どなりつけた。 それから、かいじゅうならしの　まほうを　つかった。 マックスが　めを　かっと　ひらいて、かいじゅうたちの　きいろいめを　じーっと　にらむと、 かいじゅうたちは　おそれいって、こんな　かいじゅう　みたことない　と　いって、
11	and made him king of all wild things. "And now," cried Max, "let the wild rumpus start!"	ぼうやは　えらく　なりました おばけは　みんな　けらいです マックスおうの　　けらいです 「こんやは　みんなで　ひとさわぎ おばけさわぎを　はじめよう」 マックスおうが　　いいました おばけの　けらいに　いいました	マックスを　かいじゅうたちの　おうさまに　した。 「では､みなのもの！」マックスは　おおごえを　はりあげた。「かいじゅうおどりを　はじめよう！」
12			
13			
14			

Where the Wild Things Are　翻訳対照表			
画面	*Where the Wild Things Are*	『いるいる　おばけが　すんでいる』	『かいじゅうたちのいるところ』
15	"Now stop!" Max said and sent the wild things off to bed without their supper. And Max the king of all wild things was lonely and wanted to be where someone loved him best of all. Then all around from far away across the world he smelled good things to eat so he gave up being king of where the wild things are.	「やめろ！　うるさい！　たくさんだ！」 おばけが　ぼうやに　しかられた さわぎ　　すぎて　　しかられた いたずら　しすぎて　しかられた ばんごはんも　もらえずに おばけは　しずかに　なりました しずかに　しずかに　なりました ぼうやは　さびしく　なりました だんだん　さびしく　なりました だれかが　こいしく　なりました どこかで　なにかが　においます とおくで　かすかに　においます ばんごはんの　においです おいしそうな　においです	「もう　たくさんだ。やめえ！」マックスは　さけんだ。ゆうごはんぬきで　かいじゅうたちを ねむらせた。すると、どうだろう、マックスは　おうさまなのに　さびしくなって、 やさしい　だれかさんの　ところへ　かえりたくなった。 そのとき、とおい　とおい　せかいの　むこうから、 おいしい　においが　ながれてきた。 マックスは　かいじゅうたちの　おうさまを　やめることにした。
16	But the wild things cried, "Oh please don't go —— we'll eat you up —— we love you so!" And Max said, "No!" The wild thing roared their terrible roars and gnashed their terrible teeth and rolled their terrible eyes and showed their terrible claws but Max stepped into his private boat and waved good-bye	「かえっちゃ　いやだよ　マックスおう！」 「いっしょに　いてよ　　マックスおう！」 「かえって　いくなら　　たべちゃうぞ！」 おばけが　みんなで　どなります ぼうやに　みんなで　どなります おそろしい　きばが　ひかります おそろしい　つめが　のびてます おそろしい　めだまで　にらみます それでも　ぼうやは　かえります マックスごうで　かえります	かいじゅうたちは　ないた。「おねがい、いかないで。 おれたちは　たべちゃいたいほど　おまえが　すきなんだ。たべてやるから　いかないで。」 「そんなの　いやだ！」と、マックスは　いった。 かいじゅうたちは　すごい　こえで　うぉーっと　ほえて、すごい　はを　がちがち　ならして、 すごい　めだまを　ぎょろぎょろ　させて、すごい　つめを　むきだした。 しかし、マックスは　さっさと　ふねに　のりこんで、さよならと　てを　ふった。
17	and sailed back over a year and in and out of weeks and through a day	ぼうやの　おふねは　ざんぶりこ あさから　ばんまで　ざんぶりこ ざんぶりこっこが　　いっしゅうかん ざんぶりこっこが　　いちねんかん おふねは　やっと　つきました	1しゅうかん　すぎ、2しゅうかん　すぎ、 ひとつき　ふたつき　ひが　たって 1ねんと　1にち　こうかいすると、

Where the Wild Things Are　翻訳対照表			
画面	*Where the Wild Things Are*	『いるいる　おばけが　すんでいる』	『かいじゅうたちのいるところ』
18	and into the night of his very own room where he found his supper waiting for him	とうとう　おへやに　つきました あのひの　よると　　おなじとき ぼうやの　おへやに　つきました おいしい　においが　してました おへやに　いっぱい　してました ばんごはんが　ありました ぼうやの　おへやに　ありました	いつのまにやら、おかあさんに　ほうりこまれた　じぶんの　しんしつ。 ちゃんと　ゆうごはんが　おいてあって、
19	and it was still hot.	ゆげが　でたまま　ありました あたたかいまま　　ありました	まだ　ほかほかと　あたたかかった。